ワイズ出版

HONTAMA

本魂

２０１２年４月　第２號発行

ワイズ出版
〒160-0023　東京都新宿区西新宿 7-7-23-7 F
TEL・03-3369-9218　FAX・03-3369-1436
www.wides-web.com

映画書籍の古典
ワイズ出版映画文庫

第１弾
『完本 石井輝男映画魂』
石井輝男、福間健二・著
耽美とセンチメンタル、日本映画異端の巨匠、キング・オブ・カルト石井輝男監督の全貌。

第２弾
『映画的な、あまりに映画的な マキノ雅弘の世界』山田宏一・著
粋でお洒落で面白い……。映画の神様・マキノ雅弘監督の映画世界を、映画の言葉で語りつくす。

２０１２年４、５月発売

沢島忠監督に聞く
マキノ雅弘監督のこと

マキノ監督のことを私は〝おやじさん〟と呼んでいました。マキノのおやじさんは、とにかくお話し好き、お話上手なかたでしたね。私が東横映画に入ったのは昭和二五（１９５０）年。ものがないときなので、おやじさんのお姉さん、マキノ智子さんが、おやじさんのためにお弁当を持って来られる。私は、智子さんが連れて来られた、おやじさんの甥にあたる雅彦（津川雅彦）君の子守をやらしてもらいました。おやじさんは食事が終わってもしゃべっておられる。しゃべりにしゃべりつづけられる。朝来ても、ずっとしゃべっておられて、スタッフが、もうおやじさん、撮影に入ってもらっていたいなあ、と思っても、全然ダメで、ずうっとしゃべっていやはる。そのうちに、みんないなくなる（笑）。私は入ったばっかりで、おやじさんを尊敬していましたし、子供の時から、スクリーンでマキノという字は見てましたから。私ひとりがずっと聞いてる。みんなは何度も聞いた話だから、どんどん出ていきます。撮影に入りますと、私は怒られ役。その頃はおやじさんのヒロポンのひどい時で、ヒロポンが切れてくると、ますます怒る。そこで、射つ役目の人がいて、おやじさんの服の上から射つ。そしてまたお話が始まる。私はずっと、ひとりで聞いてました。一生懸命聞いた。お弁当を持ってきてる智子さんが、私に「マーちゃん（雅弘監督）に、よう怒鳴られてるらしいな。でも、マーちゃんが〝ワシの話を聞いてるのはアイツだけや、アイツは見どころがある〟と言ってたわよ」と言われた。私は涙が出ましたわ。

おやじさんのお話は映画的で、ドンドン大きくなるんです。「テープレコーダーはワシが作ったんや」と、初年兵の私はずーっと信じてました。で、お葬式の時、雅彦君に、「おやじさんのテープレコーダーを作った話、ズーッと信じてたんや」と言ったら、雅彦君も「私も信じてました……」と。そう言われて「私と同じ人がいた」と大笑いでした。とにかく話がうまくて、引き込まれるんですわ。

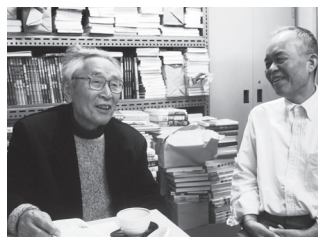
ヒロポンはねえ、私らも射たれましたけどね……。『レ・ミゼラブル　後篇』（50）で小沢茂弘さんがチーフで私がセカンド。香盤を素晴らしい文章で、みんながアッというくらいのを書こうと意気ごんで、ヒロポンを射ち徹夜で書きました。ところが朝になってもいい文章は全然出来てません。ひどい香盤です。ヒロポンは、出来ないのに出来てるような錯覚を起こさせるものです。

『殺陣師段平』（50）のクライマックス、段平が中風になったため、沢正の忠治に殺陣をつけに行けない。そこで娘が、段平に聞いた殺陣を舞台の沢正に伝えにくるカット、段平が月形のおやじさん、沢田正二郎役が市川右太衛門御大。段平の娘役の月丘千秋さんが花道を走りこんできます。その時の演技指導でおやじさん、初めは「ダーッと来て、こう倒れんのや」と左向きに倒れる。月丘さんがその通り、ダーっと来て、左向きに倒れる。するとおやじさんが「あかん、あかん、そりゃ違う。こうや」と、全然前と変わって右向きに倒れる。全く逆の演技指導をなさる。ヒロポンちゅうのは、いい仕事一生懸命やってると思わせる薬。やるたんびに変わってる。月丘さん、かわいそうでした。

映画はよかったが、撮影は大変でした。南座がはねて、夜十時から朝の六時まで借りてる。今、テレビがやってるように、カメラ三台、一階、二階、三階に置いてる。普通はカメラ一台で「ヨーイ、ハイ」と、やるんだけど、おやじさんは一階の真ん中に陣取って、コードひいて、自分一人でスイッチ入れて、「忠治が出てきたところは二階のカメラや。三階のカメラはクローズアップや」と、カット割りしながら撮られる。昭和二五年当時、そんなことやってる人、いませんでした。本当に才人ですね。

そうです、早く撮るためにやっておられるんですが、助監督は大変です。南座の一階から三階に駆け上がったり降りたり。大変やったけど、私の好きな作品で、この一本でマキノのおやじさんに心酔しました。

私が助監督として最初についたのは、早撮りの渡辺邦男監督『いれずみ判官　前後篇』（50）で、二週間で撮り上げられた。一本、一万円の契約で助監督になって、当時の一万円は破格ですから、二週間で二万円もろうたんですから、びっくりしました。でも、次についた『きけ　わだつみの声』（50）、これは当時、製作主任だった岡田茂さんの初めてのプロデュース作品で、東横創立メンバーの反対を押し切って苦労して撮り上げた作品だったんですが、撮影が二ヶ月もかかって、それでも一万円（笑）。監督は関川秀雄さん。映画の出来もよかったし、お客さんもよう入った。でも東横には配給収入が入らない。自社配給ではなかったから。もう東横はつぶれるという昭和二六年に、東横と大泉映画と東京映画配給が合併して東映株式会社となるんです。これはすべて、五島慶太翁の起死回生の策でした。経理のプロと言われた大川博さんが社長として乗り込んできました。その年の暮、ＧＨＱの時代劇禁止が解禁となり、東映躍進復活劇が始まったのです。



『忍術御前試合』（57）で私は監督デビューするんですが、その間の東横→東映で撮られたマキノ八作品のうち、四作品に助監督としてついた頃がマキノ監督と最も濃密な時間を過ごした時期でした。最初についたのが『殺陣師段平』。その次が『レ・ミゼラブル　後篇』で、この時もヒロポンのひどい時。マリユス役の原保美さんとジャン・ヴァルジャン役の早川雪洲さんの娘さん、早川富士子さんのコゼット役とのラブシーン。これを折鶴で撮るという。二つの折鶴がだんだん近づいて顔が重なるように台を叩け、うちわで鶴を動かすようにあおげと。ラブシーンを折鶴で表わそうというわけです。

狙いはいいんですが、すんなりいかない。怒られましたね。「バカモン、そんなことしてるからあかんのや、学校出てる奴は役に立たん」。徹夜で朝まで折鶴をエンエンとあおぎました。ヒロポンを打ってますからね（笑）。マキノ組はいつも徹夜。きれいなシーンなんですが、やる方は大変です。

それから脚本が気に入らないからと、私に「わしの言う通りに書け」。私が筆耕するんです。「シーン１　江戸の町。荒れた姿に化粧して、夜ともなれば美しい」と、まるで活弁。流れるようにしゃべる。それを私が書く。

殺陣もね、「あかん、あかん、そう斬ったらあかん。こう斬んのや」と。殺陣師に一応やらせてますが、自分が殺陣をつけてました。その殺陣がまたいいかっこに決まるんです。ちょっと殺陣師が他の組と重なってると、「おう、お前、やっといたぞ」と、得意の巻です。

踊るような殺陣です。人間国宝の藤間勘十郎さんの一番弟子や、と言ってたくらい。勘十郎さんを「師匠、師匠」言うてやはった。勘十郎さんは困ってましたわ（笑）。とにかく自分で全部、なんでもおやりになる。

一番舞踊を基礎にした殺陣は市川右太衛門先生。錦之助（錦之介）さんも書いてましたけど、あのタチまわりが一番むつかしい。右太衛門先生は六歳から踊りをやっておられました。〝諸羽流正眼崩し〟も自分で作られた構えです。

おやじさんはラブシーンが一番うまい。「そこに立ってみい。そこで、足で〝いろは〟を書くのや」と。足で地面に〝の〟の字を書くと恋人を待ってるように見えてくるんです。感性の鋭い人でね。ホンにもなんにも書いてないのに、すぐ自分でおやりになる。若い時から役者をやり監督もやってらっしゃったから。実に器用な方です。

現場がせわしくないかって？　それはないです。渡辺邦男監督も早いけど、マキノのおやじさんはそれとはちがう撮り方で、うまく、早い。早さだけなら渡辺監督のほうが早いですね。

おやじさんを好きで、尊敬していましたから、似てるって言われるのは、自然に身についたんでしょうね。家内（スクリプターの高松冨久子。脚本の鷹沢和善は沢島監督との共同筆名）からもよく言われました。「マキノ先生のマネするんじゃありません」と。マネしてるつもりはないんですが、自然に、身についたのが出てくるのです。それだけ好きでしたから。

私は子供のときから映画ファンで、弁士になろうと思ったぐらいです。兵隊から帰ってきて、映画を観ると、映画があまり変わっていないんですね。もっと新しい時代、若い人、現代人に直接伝わるようにと思ったんです。時代劇ミュージカルを始めたのは、『ひばり捕物帖　かんざし小判』（58）です。その前に撮った錦兄（きんにぃ＝錦之助）主演の『江戸の名物男　一心太助』（58）、あれから時代劇の流れが変わったと言われました。

マキノさんがケチだというゴシップ？　ケチなお人ではない。私はブレザーをいただいたり、よくして下さった。ただ他の監督はみなを連れて酒を飲みに行ったりするけど、おやじさんは酒を飲まないから。スタッフと飲みに行かなかったから、ケチだという人がいたのでしょう。

マキノ監督の『神戸銀次郎旅日記』（51）は、融資を受けるため神戸銀行頭取を主役にして作った時代劇で、マキノさんがノーギャラでいい、と言って撮りました。主役はシロウトですが、お芝居好きだとかで、多少演技の心得みたいなのがあったかもしれません。マキノのおやじさんは、こういうシロウトを動かすのも名人でしたね。

ええ、リメイク好きなんですよ。私は一ぺんやったものをもう一ぺんやろうとは思わないけど。おやじさん、昔のものが大好きなんです（笑）。『浪人街』（28・29）のリメイク『酔いどれ八萬騎』（51）の撮影で忘れられんのは、ラストの母衣権兵衛役の月形のおやじさんが裸馬に乗って悪浪人たちを威嚇しようと猛スピードで彼らの周りや中を駆け回るカットを、マキノのおやじさんが、「こうやるんや」と裸馬に飛び乗って浪人たちの周りを二周三周と猛スピードで駆け回るのです。あまりの素晴らしさにスタッフ、キャスト全員が拍手。あのおやじさんの英姿がいまだに目に残っています。そうですね、マキノのおやじさんに映画で出来ないことはなかったんじゃないかと思うほどですよ。何でも出来た。天才ですね。そして、とにかく粋なセンスでスマートな方でね。かっこよくて、素晴らしい監督でした。私は心から敬服し尊敬していました。かけがえのない出会いであり、思い出です。

（談）

＊カッコ内の映画製作年は西暦表示です。

聞き手・浦崎浩實（映画・演劇批評家）

沢島忠全仕事
ボンゆっくり落ちやいね
澤島忠・著
東映ヌーヴェルヴァーグ時代劇の旗手にして、東映任侠映画の嚆矢『人生劇場飛車角』を監督した沢島忠の集大成本。
Ａ５版上製／四三二頁／三九九〇円